
柚木と謎の生物君達

ミナカミツカナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

柚木と謎の生物君達

【Nコード】

N4300A

【作者名】

ミナカミツカナ

【あらすじ】

柚木（12）は、高級マンションに住んでいる超お金持ち（両親が）。ある日強化ガラスの窓を割って入ってきたのは、死神と悪魔と魔法使い！ちよっぴりえつちな場面もあるけど、行く先わからない謎の物語。いずれ、ヴァンパイアや閻魔大王まででてるかもしれない……！？

第一章 死神・悪魔・魔法使い（前書き）

こんにちは。初投稿デス！これからよろしくっス！

第一章 死神・悪魔・魔法使い

こんにちは。

あたしは、美志奈^{みしな} 柚木^{ゆぎ}<12>です。

今、あたしは家で、勉強をしています。 一応ね……。その理由は…………。

「おいっ！ 柚木！ 菓子ねーか？」

「柚木！ お菓子ちょうだい！」

「ボク、クッキーがいい！」

この三人（男）のため。

実は二人…………。

死神と悪魔と魔法使いなんです。

来てくれるなら天使が良かったけど…………。

来ちゃったんです。なぜか。

それは、いつもの毎日。

家は、両親が有名なデザイナーと大手会社の社長で、一応金持ちです。

でも、両親は今、海外へ売り出すために、海外へ行っています。
5年前から。

一体、いつまでかかるんだ、って感じ。

まあ、そーゆーことで、家のガラスは強化ガラスなんです。

な・の・に！

普通にガラスを割って出てきたんです。この三人。
三人とも、あたしと同じ年。

死神の方は「ティイズ」って言って、傷がいつぱいついた、銀色の
鎌・黒い、血がところどころついたマント。下には、黒いタンクト
ップと黒いダブダブ！って感じのズボン。黒いブーツ。銀色の短い
髪が綺麗！眼も銀色！

悪魔の方は「アオリ」って言って、大きな黒い翼を生やした、黒い
手袋・黒い帽子・黒いＴシャツ・黒い半ズボン・黒いブーツ・赤い
眼・赤い短い髪。

魔法使いの方は「ミルイズ」って言って、紫の大きな先がとがった
帽子・フード付きのワンピースみたいな服。手には、赤いダイヤが
埋め込まれた、大きな杖。何か訳の解らない文字が書いてある。紫
の眼・紫の短い髪。

なんか、三人とも来てすぐに冷蔵庫をあさる、食い意地が張った馬
鹿です。

「柚木！まだあゝ？」

魔法使いのミルイズが、手足をばたつかせながら叫ぶ。

「そつだ！早くしろ！」

生意気な悪魔のアオリが起こった様に言う。

「早くしろー！！殺すぞ！」

自分勝手な死神のテイイズが、鎌を持って言う。

「うつさい！こっちは、今大変なの！」

柚木が、強化ガラスの説明書を読んでいる。

そこに乗っている業者に直してもらうのだ。

「ん？それぐらいなら、直してあげられるよ！」

突然、ミルイズが後ろからひょっこり現れ、言った。

そして、ミルイズが、杖を上に向け何かを唱えた。

その瞬間、割れたガラスが割れた形跡もなく、元通りになった。

「！すごいじゃん、ミルイズ」

「でしょ？それでも、魔法使いなんだから！」

ミルイズは、軽くウインクをした。

「終わったことだし、早くお菓子頂戴！」

「お菓子？ちよつと待っててね。買ってくるから」

「ええ！？今食べたい！」

「今ないから買ってくるの！」

ミルイズが駄々をこねた。

柚木は、駄々をこねるミルイズを無視して、玄関へ向かった。が、

「じゃあ、いいよ。あるの食べるからー！」

と、怒ったように、手を腰に当て、言った。

「え？何食べるの？」

「うゝん・・・生气」

「は？生气？何それ。ていうか、誰の？」

「柚木の！」

「嫌」

柚木は即答した。

ていうか、生气って何よ！

「えゝ！じゃあ、ボクキャビア食べたい！」

「嫌」

「どっちかじゃないと、嫌ゝ！！！！」

「・・・・・・・・・・」

ふざけんな。

本来ならすぐ殴っていききたい所だけど・・・ここは、少し我慢しようじゃない。

「ねえ！いいでしょ？柚木！」

「何！？ミルイズ！オマエ、生気喰うのかっ！？ずるいぞ！」

ティイズが、大声で叫ぶ。続いてアオリが、

「ホントだ！オマエ、独り占めはゆるさねーぞ！」

と、絶対近所迷惑な声で叫ぶ。

ここが、高級マンションでよかった。

防音効果は優れている。

「はあゝ・・・五月蠅いなあ・・・少し黙ってよ」

柚木は、そういいながらテレビをつけようとした。

が、その前に柚木はその場から消えた。

気づいた時にはもう、自分家ではなかった。

「あ・・・あれ？ココ・・・どこ？」

「あつ、やつほゝ！柚木ゝ！ココはボクの家だよゝ！」

ハイテンションなミルイズが、お茶を持って柚木の前に来た。

「あつ・・・どうも・・・じゃなくて、なんであたしはココに！？」

「えっ？だって、生気食べさせてもらうもん！あそこじゃあ、人間の思い通りの世界だから、ボク等は思うように出来ないんだ！だから、ココにきてもらったんだ！」

いやいやいや。

そんなハイテンションで言われても。

困るんです。

早く帰らせてください。

ていうか、後の二人はあたしの家？

「後の二人は、今度にするって！」

ああ、そうなんだ。

今度が……って、あの二人も「生气」ってやつ食うのか？

というか、死神・悪魔・魔法使ってこんな生物だっけ？

よく、死体とか喰うって……。

「それは、嘘」

へ~~~~~。

嘘なんだあゝ。

………って、

「アンタ、もしかしてあたしの考えてること……。」

「?うん、判るよ。今、どうして?って思ってるでしょ?」

はい、図星です。

ミルイズは普通の事みたいに、言う。
そっか、アイツ・・・魔法使いだった。

「じゃっ、さっそく食べるね!」

ミルイズが、柚木に近づいてきた。

「えっと・・・ちよつと、ストップ!何を食べるの?」

「えっ?生氣だよ、柚木の」

「そうなの?判った・・・・・・・・て、言うかアホ

!!!!!!」

柚木はミルイズの頭に、ジャッキーよりも強い手刀を喰らわせた。

「わあああああっ!痛い!痛い!痛いよゆずきい!!!!」

「当たり前!痛くしたんだから!じゃなくて、生氣って」

「う・・・うん。「生きるために必要な氣」だよ・・・」

ミルイズは、頭を抑え、涙目になりながらも答えてくれた。

「じゃあ、それ全部食ったら!?」

「死」

ミルイズは、やっぱり頭を抑えながら、普通に言った。

チィ

ン・・・・・・・・

今・・・お坊さんと、墓が見えたよ。

「でも、大丈夫。柚木は「完全果実」だから」

「か・・・完全果実う！？」

「うん。完全果実って言うのは、生きてる内に何度も生気を食べられても、深夜0：00にまた回復する、この地球上に10人も居ないといわれてる、珍しい人間なんだよ。それに、とっても甘くておいしいんだ！」

「へ・・・」

柚木はしばらく感心していたが、ハッ、となって気づいた。

つまり、これから何度も食われるってこと・・・まさかね・・・

「そう。大正解！これから柚木はボクらに何度も食われるってこと！」

ああ・・・あたしはなんて推理力が高いのでしょうか・・・（涙

「じゃあ・・・その椅子に座って！って、このままだと食べにくい！服、脱いでくれる？」

嫌。絶対嫌。ふざけんなだよ。

柚木がなかなか脱がないので、少し不機嫌になったミルイズは魔法を使った。

「えっと・・・dress take off！（ドレス・テイク・オフ）（服・脱ぐ）」

すると、突然柚木の周りを白い光が包んだ。

「きゃあっ!？」

しばらくして柚木は、悲鳴を上げた。その理由。

呪文の通り、服が無くなっていたからだ。

まあ、柚木は下着が恥ずかしい柄ではなくてよかったと、思った。

んでもって、服だけでよかった。下着まで脱がされたらヤバイよお・
・・。

そう思いながらも、柚木は消された服を探した。

終わったらすぐ、この恥ずかしい格好から逃れるためであった。が、

「無い?どこ?」

「服は、ココだよ!」

ミルイズが、自分の手の中にある、薄いピンク色のワンピースを指
差した。

「あつ、あたしの服!返して!」

「ヤダ。だってまだ、食べてないもん!あつ、そうだ! s t o p
(止まる)」
ストップ

パキンッ、と柚木の体が動かなくなった。

もちろん、椅子に座ったまま。

ミルイズが、「用意が出来た」と言う顔になった。

そして、ゆっくり柚木のほうへ歩いてきた。

そして、

「痛っ!」

柚木が、眼を強く閉じた。

「・・・痛い？」

ミルイズが柚木の綺麗な首筋に、噛み付いていながら訊く。

柚木は痛さのあまり、声が出ない。なので、首を縦に振った。

ミルイズは、につ、と笑って、さっきより強く噛んだ。

「痛い！やめて！」

柚木は、眼に涙を浮かべた。

しかし、それを気にすることも無く、ミルイズは続ける。

首筋からは、血が流れた。

「あつ・・・痛い・・・やめて！」

柚木は、願ったがあっけなく拒否された。

しかし、ミルイズは柚木が痛がるにつれ、満足したような顔になる。

「もう・・・やめ・・・て・・・」

柚木は生気を食べられたからか、力が出なかった。

「あ~~~~！おいしかった！ご馳走様！」

ミルイズは満足したのか、柚木への呪文を解いた。

ふつ、と柚木の体を固定していたものが取れるように、柚木は前へ倒れた。

「やっぱ、最初からはダメだったか・・・まっ、しょうがないね」

ミルイズは柚木を抱きかかえ、柚木の家へと戻っていった。

翌朝。

「んんっ……!」

柚木はベッドから、起き上がった。

そう、起き上がった。

「………ちょっと待て。何であたし起き上がれるの?」

柚木は、眉間にしわを寄せる。

「おっはよお……! 柚木……! 大丈夫?」

やっぱり、ハイテンションなミルイズが柚木の部屋のドアを開け入ってきた。

そして、イキナリ柚木に抱きついてきた。

「あゝよかった! たとえ、完全果実でもアレは最初からじゃ辛いかなね! 死んだらどうしよーかと・・・」

パチンツ、と柚木はミルイズのでこをでこピンした。

「痛っ!・・・けっこー効くね・・・コレ」

ミルイズは、でこピンされたところを抑えながら、言う。

「たくも……勝手に殺すな！あたしはちゃんと、生きて……
なんで!？」

「あれ？覚えてない？完全果実は深夜0：00にまた生気が戻ると」

ああ、そういえば言ってたよ。

まあ、よかったよ。

死ななかっただけ。

そして、またドアがイキナリ開き、ティイズが入ってき、言った。

「オイ、今日はオレの番だぞ！ミルイズ！」

「うん。判ってる！一日ごとに交代だもんね！今日はティイズの番でしょ？」

ミルイズは、にこやかな顔で答える。

えっ……？ちよつと、待て……。今日は……？

それに気づいたのか、ミルイズが答える。

「あつ、あのね、一日ごとに交代して、柚木の生気を食べれるの！
まあ、食べ方はいろいろあるけど、その中のどの食べ方でもいいって条件で」

「あと、どんな風にしてもいいって条件も」

「OK！」

やっぱり、ミルイズはにこやかな顔で言う。

いやいやいや。

OKじゃないよ、本人の意見は？

そんなことも気にせず、三人の話し合いは続いていった。

そして今日は ティイズの番。

って・・・だから、ちょっと待って！あたしの意見は！？

えっ！？無し！？

第一章 死神・悪魔・魔法使い（後書き）

わぁ

んっ！食費が一気に消えた！IN 柚木

ティイズ・キス・仕事たんまり（前書き）

今のうちにシッブを・・・。

ティイズ・キス・仕事たんまり

ちよつと、待って！

今日はずて、何

！？

柚木は心の中でツツコム。

そんな柚木を気にもせず、三人はぺちやくちやと話す。
が、不意にティイズが、思い出した用に話す。

「そついえば

が来るらしーぜ」

来る？誰が？

途中の部分が聞き取れなかったが、何かが来ることはわかった。

「変なのが来ないと良いけど・・・」

柚木はぽつり、と言葉を漏らした。

「んっ・・・そーいや、飯まだか？」

「そうだった、まだあ？」

「うんうん。早くしろ」

「生意気な口利くと、作らないよ？」

「はい。すみませんでした」

おお・・・食事がここまで効くとは思わなかったよ。

「マジだ」

「えっ？何？何が来た？」

柚木は、食器を片付けながら、尋ねる。
その時、

パリ

ンッ

あまりにも突然であつたため、柚木は何があつたか把握できていない。

だが、自分の上に、また少年が乗っていることだけはわかった。
牙が生えた、少年だ。

「あ・・ありいゝ？失敗？」

少年はそんなことを普通に言つた。

いやいやいやいやいや、ストップ！

また普通に、強化ガラスを割らないでよ。

ちよつと、ここの強化ガラスこんな安物かと思うじゃん。

「あつ、どうも。キミが柚木？」

「え？い？あつ？あ・・そう・・そうだよ。あたしが柚木」

「ふゝゝん・・皆ずるい！完全果実がご飯だなんて！」

「でしょ？」

「おうつ！便利だぞ！」

便利って何？

「そうっ！うまいぞ！」

あたしゃ、ティイズに食われた覚えはまったく無い。
ん？そーいや、コイツ誰？

「ああ、コイツはヴァンパイアのゼルーだ」

ティイズが言う。

「よろしくっ！柚木」

似てる。絶対、ミルイズに似てる。
なんか、ワケわからないけど似てる。

「あのさっ、コレ………食っていい？」

ゼルーが大量にある目玉焼きを見て言う。

「OKOK！どんどん食べて！」

オイ待てコラ。

そりゃ、あたしが作ったんだよ！

オマエのじゃねーんだカラ、勝手にOKすんな。
ミルイズ、オマエの飯はなくなったと思え。
ザマーミロ！

「オイッ、柚木。今日はオレの番！仕事、手伝ってもらっぞ！」

唐突にティイズが、鎌を持って言う。

「仕事？ああ、死神業？いいよ・・・・・・・・・・んじゃないッ
ッッ！なんでええ！？」

「ああ？今日はオレの番だから、溜まった仕事手伝ってもらっぞ」

ダメだ。聞こえてない。聞こえてるけど。

つか、なんであたしが？

ああ、「オレの番」か・・・。

・・・・・・・・・・ウザッ。

「んじゃ、まあ。行ってくるわ」

ティイズは柚木を持ち上げ、肩に乗せ、進む。

「えっ？えっ？あっ？ええ！？ちょ・・降ろして！って、聞けよ！
」

ティイズは激無視をしながら、どんどん進む。

そして、ある鏡の前につれてこられた。

その鏡とは、両親がオークションで落とした、ダイヤがそこらじゅうに散りばめられている、なんとも輝かしい鏡であった。

「じゃーな」

「うん、いってらっしゃい」

最終的に、鏡の中から「お助けを」と言う声が聞こえる。

残った、三人は飽きずに目玉焼きを頼張る。

「・・・・・・・・・・そういえば、さつき連絡があっただけど、今死神業大変なんだって。なんか、変わり者が居るんだって。それも、白い」

「白い死神？変わってんね。まあ、ティイズも相当な変わり者だよ
ね」

「なんで？」

「よく食うから」

「オマエにだけは言われたくないんじゃない？」

「そうだね。そういえば・・・・・・アオリは？」

「さあ？悪魔業じゃん？」

「そっかあ」

そして、二人は懲りずに目玉焼きを頼張る。
よく飽きないもんだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
どこ？」

「死神界。おらっ！」

ティイズが、自分と同じぐらいの大きさの鎌を渡される。

「えっ？ぐはあっ！？お・・・重ッッ！」

「そうか？まあいい。いくぞ」

ティイズはそう言うと、ふわりと宙に浮いた。

「えっ？無理だよ、あたし飛べなあああああああっつ
つ！？」

柚木の言葉が言い終わることなく、柚木は空を飛んでいた。

「・・・ちゃんと、飛んでくださいよ」

「ヒイツ！？」

か・・・・・・鎌が喋った！？

確かに、鎌はひとりでに喋った。

「あつ、紹介が遅れました！」

そういうと、鎌からポンツ、とはじけるようにして、可愛い灰
色のハムスターに真っ黒なコウモリの翼が生えた、ブルーの瞳をし
たハムスターが出てきた。

「わああああああああっつ！？何？何？何事
！？」

「叫ぶな、これは使え魔っていつて、オレら死神の手伝いをする、生き物だ」

「……………だつたら、アンタ自分の使え魔さんに頼んで、手伝ってもらえばいいじゃん」

「あゝ、今アイツどこにいるかわからないんだな」

柚木は一瞬気が遠くなった。

「馬鹿。で、アンタは？」

『初めまして、ご主人様。ボク……いいやつ、わたくし……？は、ルモア・ビーズル・ベーキラと申します。えっと……男ですっ！』

最初はうまく言ったものの、自分の呼び名で失敗してしまった。

「そっか、あたしは……」

『存じております。美志奈柚木様でしょうか？ティイズから伺っています』

ルモアは、パタパタと空を飛びながら言う。

「そっか、んじゃ、話は早い。あたしの性格ではね、敬語は許されないの。意味、判る？」

柚木は、ルモアを抱き上げ、言う。ルモアは、薄く笑い、言った。

『敬語を使つな、でしょうか?』

「正解。キミもそっちのほうがりやすいでしょ?」

『もちろんです』

ルモアは、ぶるぶると首を振った。

『じゃあ、お言葉に甘えて。ついでに、ご主人様はなんて呼べば?』

「名前でいい」

『OK』

「どうだ?話し合いは終わったか?」

ティイズが、終わったのを確認して聞く。

『まね』

二人は同時に言う。

「じゃ、いくぞ」

ティイズはそう言うと、びゅっとスピードを上げ、飛んだ。
二人(?)も続く。

「……アレは?」

三人（？）が行った後、そこには、全身白の少女と真逆の真っ黒なハムスターが居た。

「あれは、ティイズ・クローン・クローンいないけど、と、新入り（？）かわかんないけど柚木・ルモアだよ」

「ふうん・・・」

「そうしたの？キナ。珍しい」

「そっ？まあいいよ。早く行こう」

「うん」

二人は会話を済ませると、すうつ、と消えていった。

ザンツ、と鎌が綺麗な切り線を描いて落下する。

「おじいちゃんっ！？」

「おじいさんっ！」

「お父さん！！？」

「義理父さん（おとうさん）！！？」

家族の声が一気に家に響く。

ツツツ・・・

「
柚木は息の詰まるような思いをした。
とつても、辛い。」

隣のティイズは、唇をかみ締めている。
柚木は、眼に涙があふれた。

柚木には、今は居ない一人の兄がいた。

3歳上の、優しくて面白い、強くてかつこいい、勉強・運動ともに
出来た兄が。

その兄の名前は、柚璃^{ゆずり}。女の子らしい名前であった。

柚璃は運動面では、とくにサッカーがうまかった。

いつも選抜のメンバーであったし、多くの大会にも出ていた。
勉強面では、いつも学年でトップ。

家庭科などの面でも、よかった。

なのに、死んだ。

今みたいな哀しい気持ち味わった。

でも、今のは、他人。

自分のときはもっと辛かった。

飛ぶ体。

叫び。

サイレン。

壁に寄りかかるコドモ。

思い出した。

柚木は過去に一度だけ、今やっている死神にあった。
それは、ティイズでは無い、他の死神。

真っ白な、雪の少女。

「じゃっ、次行くぞ」

ティイズの声で、ハッ、と我に返った。

「どうした？」

「あっ、なんでもない。ごめんごめん。さっさと……」

柚木は眼を見開いた。

そこには、雪があった。

いや、少女だ。真っ白な。

「柚木ちゃん？」

その声まで真っ白な少女はそう言った。

白い眼・白い髪・白い肌・白い服・白い靴・その中で目立つのが、
真っ黒な鎌。

「誰だ？」

ティイズは、聞く。

「わたしはキナ。皆からは、知ってるでしょ？ルファって呼ばれてる」

「ルファ？」

「変わり者って意味だ」

ティイズは、付け足した。

「きょうは、アナタに・・・柚璃君から伝言があるの」

「お兄ちゃん？」

「そう、「元気に暮らせよ」だって」

「・・・それだけ？」

「うん。それだけ」

「・・・まあ、結構仲良くしてますよ。
ワケの判らないのと。」

「それじゃっ」

少女　キナは、くるり、と後ろを向いて去ろうとした。

「待つて、ストップ！」

「何？」

「お兄ちゃんに伝えて。「おりがとう」って」

キナは、優しく笑うと言った。

「いいよ、この手紙。わたしが必ず届けてあげる」

「ありがとう、と。あのさ、ワケのわからないのがいっぱいいるけど、家・来てね。暇だったら」

キナは、これには驚いたという顔になる。今まで姿を見せなかったハムスターとひょこつと出てきた。

「人間のクセにつ！キナはいそがしい・ふがふどつががふ〜」
「！」

「レンっ！言わなくていいの！」

キナがハムスター　レンの頬をありえなくほど引っ張り、その言葉を阻止する。

「プッ・・・アハハッ！」

「アハハハハハハハハハハハハハハハッ！……ウケル！変な顔ふぎやふぎやふぎやぎやぎやぎやふふぐぐふぎや……」

こっちは、柚木によって阻止された。

「それじゃ」

キナはそう言って、その場から消えた。

「ふがい、ふがい、ふがつづけだぞ！（痛い、痛い、痛いって言うてるだろー！）」

「あつ、ゴメン」

柚木はティイズの頬をつねるのをやめた。
放された頬は、赤く染まっていた。

「つてーな・・・」

「あのさ、これからどこに行くの？」

「・ ・ ・ ・ ・ 後3件。事故現場・寺・事務室」

「そっか、じゃあ……早く行こつ！」

柚木は、ティーズの手を引き、飛んで行った。

「ヴァ~~~~はらへったあ！」

「そうだね・・・」

柚木とティーズは、くたくたになっていた。

最初の2件はどうでもよかったが事務室での仕事がオドロキであった。

地獄か天国か選んで転送するのだ。

しかも、魂の数が半端ではなかった。
そのため、

うげ& a m p ; # 8 7 6 4 ; & a m p ; # 8 7 6 4 ; & a m p ;
8 7 6 4 ; & a m p ; # 8 7 6 4 ; & a m p ; # 8 7 6 4 ; & a
m p ; # 8 7 6 4 ; & a m p ; # 8 7 6 4 ; & a m p ; # 8 7 6 4 ;
& a m p ; # 8 7 6 4 ; & a m p ; # 8 7 6 4 ; & a m p ; # 8 7
6 4 ; & a m p ; # 8 7 6 4 ; & a m p ; # 8 7 6 4 ; & a m p ;
8 7 6 4 ; & a m p ; # 8 7 6 4 ; & a m p ; # 8 7 6 4 ; & a
m p ; # 8 7 6 4 ; & a m p ; # 8 7 6 4 ; & a m p ; # 8 7 6 4 ;
・ ・ ・ じぬ

であつた。

「うっわ……腹減った」

ティイズは、もうくたくたのくたくたであつた。

初心者の柚木が全てわかるわけ無かった。

なので、教えながらやるという、見事な功績を収めたのだ。

「オイ……生氣食わせろ……」

「ていうか、食べる気力ある？」

無い。確実に無い。はずだが、食事は食べるはずだ。

「グ~~~~~~~~・・・・じゃあ・・・どーすればいい？」

「とりあえず、椅子に座って、ついでに上着脱いで」

言ってる、だけでも疲れるティイズを見て「しょうがない」と言う顔をしながら、柚木は従う。

というか、なんであそこまでためるかな？

アレの疲れはモトをただせば、ティイズ本人の責任である。

「はい、脱いだよ」

「どうも」

誤るなら早く食え。

こっちは、異様に寒いんじゃ。

すると、ふらふらな足取りでティイズが歩いてくる。

「うつわー！危険！」

と言う言葉がまさに当てはまる。

「あ~~~~、すいません。脱いでもらったところ悪いんですけど、やっぱいいや。他の食べ方で行く」

「なんだよ!」

柚木はそっぴいながらも、感謝であった。すぐに、着る。

「はい、着たよ・・・次はどうすれ・・・」

ティイズは、柚木の顔を両手で押さえ、キスをしていた。

ふぎゃっ！？

柚木は心の中で驚いた。

そりゃ、当たり前。

だって、あたし・・・・・・・・キス始めてだもん。

ティイズ・キス・仕事たんまり（後書き）

キス。してみたいなあ。

うっひょー!?!?ルプミィー! (前書き)

うはっはっ!!

うっひょー！？ヘルプミー！

ストップ・ストップ・かなりストップ！

もちろん、口が動かない柚木にそんなことが言えるワケが無く・・・。

残念。である。

「ふぬ~~~~~！？ふぬふぬふぬ~~~~~！！！」

そんなことも、無視して、ティイズは続ける。

「ほおっほお、ほおっほお~~~~~！（ちょっと、まった~~~~~！！）」

「・・・・・・・・・あん？何だよ。サンタクロースの真似か？」

全然ちが

うッッッッ！！

オマエ、あたしが拒否してんのに、気づかないのか
もちろん、気づくワケが無い。
！

チクシヨ・・・。

なぜだか知らないが、柚木はティイズを恨む。
だが、今まで拒否するため、持ち上げていた腕が、がくんつ、と落ちた。

「・・・・・・・・つ・・」

ヤバイ。力が入らなくなった。
このままじゃ、まず、拒否できない。
さあ、どうする？

「ふうっ、体力回復！」

「えっ？お・・終わった？」

「ああ、まあ。つか、これ以上食ったら、まず、5週間は食べないで生きていけるな」

もっと、食って5週間生きろ。

そうすれば、拒否することも無いしな。

「んじゃ、帰るぞ」

「うん。と言いたいんだけど、無理。力が入んない」

「そか、じゃあ」

「うん、じゃあね・・・・・・・・・・んじゃねーよ
ツツ！！置いてくな！！」

「冗談冗談。ゴメンゴメン」

ティイズは、苦笑しながら言った。

「ほれ、後30秒で0:00だ」

「ホントだ。じゃあ、あと少しだね」

「おうよ」

その後。

二人は喋ることなく、30秒間を過ごしたのだ。

そして、30秒後。

ぽおっ・・・・・・・・

柚木の体を、淡い赤色で包まれた。

「ふわあっ・・・・・・・・」

「おお・・・・」

二人は、始めてみる明るく綺麗な光に見とれた。

その瞬間。

ドバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ツツツ！！

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ
ツ!!!?」

二人を突然、さっきの赤とは違う、血色みたいな赤で包まれた。

[illegible]

柚木は叫んだ。

もちろん、叫ぶ他に、なにがあるのだろう。

「おおっつ！」

「かんどうするなッッッ！」

柚木は、思いつき、ティイズの腹を手刀で叩いた。

「むがおっ!？」

ティイズは意味不明な言葉を発し、倒れた。

「な．．．なにを．．．する．．．んだ．．．！？」

「ふんっ！ 知るか、んなこと！」

柚木は、倒れたティイズをもう一回、蹴っ飛ばした。

「おむおむっっっ！」

「はああ？」

「い……今の言葉がわからんのか!？」

「当たり前。あつ、ドア発見!んじゃ、先に帰るよ」

「ま……待て!おれを置いていくな!」

「んじゃ、連れてってあげる」

「……………ぐはあっ!？」

柚木は、ティイズの首を掴むと、ずるずると引っ張っていった。

「お……おいつ!くるじ〜〜〜〜〜〜〜〜………」

とうとう、ティイズは気を失った。

「あり?倒れちった。まあいつか」

よくない。

はつきり言ってよくない。

「あの頃と、同じ」

柚木は薄く笑うと、ずるずると引っ張り、ドアに向かった。

「わ

!!!!?」

「ティイズう!？」

ミルイズとゼルーは涙目で駆け寄る。

「ゆ・・柚木、何したの!？」

「首、引つ張った」

「うひょ

!」

二人はすぐさま、ティイズをソファに寝かせる。

「ふう・・・・・あれ?そーいや、アオリは？」

「さあ?悪魔業じゃん？」

「ふうん。まっ、いつか」

たららんっ たららんっ たららんっ たららんっ

たたたらんっ たたたらんっ たたたらんっ たたたらんっ

たららんっ たららんっ たららんっ たららんっ

陽気なリズムが、柚木の携帯から鳴った。

「……………誰？」

たららんっ　たららんっ　たららんっ　たららんっ

たららんっ　たららんっ　たららんっ　たららんっ

たららんっ　たららんっ　たららんっ　たららんっ

その間にも、音楽は鳴る。

「この曲、いいね」

ミルイズが眼を閉じてしあわせそうに言う。

「この曲、なんていうの？」

ゼルーもミルイズと同じ格好をして言う。

「これは、「ゆずりんのマーチ」っていうの」

「「ゆずりんのマーチ」？変わってるね」

「うん……………まあね、じゃなくて誰だ？」

柚木は携帯を手取る。

チャクシン・柚璃。

「はい？」

柚木はもう一度、携帯を見る。

いくら見ても、変わらない。

いやいやいや。

お兄ちゃんはまだ、いないって。

なんで、着信が？

『あつ、もしもし？柚木？オレ、アオリ』

「オマエか

ツツツ！！」

『うわっ、なんだよ。何か問題でも？』

「大アリだよ、大アリ！」

『そうか？まあいいや、はい。柚璃』

「えっ？」

『あ~~~~~~~~・・・通じてる？』

ちょっと待て。

お兄ちゃんって死んでるよね？

ばっちり、見ましたよ。

『あゝ、元気か？』

オマエはどうなんだ。死んでるやつに、元気か？なんて聞かれたくない。

『オレは、まあ、元気だ』

死んでんのに？

『いま、オレは・・・・・・・・・・・・・・・・ゲーム中さ。ファナルファンタジー中』

さようなら。

プツッ。

柚木は電源を切った。

「オイッ！何すんだ！国際電話より高いんだぞ！」

アオリが天上から現れ、言う。

そりゃそうだ。

天と地上の電話なんて、本来ありえないんだから。

天地電話ってやつか？

「せっかく、柚璃と話せる機会だったのに！」

うっひょー！？ヘルプミー！（後書き）

ちょっと待て！ in 柚木

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4300a/>

柚木と謎の生物君達

2010年10月9日06時41分発行